

醸造協会

だより



1月号をお届けします。新年を迎え、新しい年が皆様にとりまして実り多い年であることをお祈り申し上げます。醸造協会は、本年も醸造家の皆様に役立つ製品やサービスを提供してまいりますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

今年、壬寅（みずのえとら、ジンイン）で、十干の9番目、十二支の3番目、干支の組み合わせの39番目になります。前回の壬寅は1962年（昭和

37年）となりますが、この年のことを調べてみました。総理大臣は池田勇人で、所得倍増政策の一環として、国土開発のための「全国総合開発計画」が発表され、高度経済成長が始まりました。歌では、橋幸夫と吉永小百合のデュエット曲である「いつでも夢を」がこの年のレコード大賞を受賞しています。アメリカ生まれのダンスであるツイストが流行し、飯田久彦の「ルイジアナ・ママ」、伊藤ゆかりの「ロコモーション」、中尾ミエの「可愛いベイビー」などアメリカンポップスの翻訳版もヒットしました。国際的には、キューバにソ連のミサイルが持ち込まれているという情報から、アメリカのケネディ大統領がキューバの海上封鎖を表明し、キューバ危機が起こりました。ウィルキンス、ワトソン、クリックが、DNAの二重らせん構造を発見して分子生物学の時代を切り開いた功績で、ノーベル生理学・医学賞を受賞した年でもあります。今年、はたしてどんな年になるでしょうか。

日本のコロナの状況は、執筆時点では落ち着いており、全国の感染者数が200人以下の日が続いています。久しぶりの忘年会を楽しむ人々の姿が、ニュースで紹介されるようになりました。しかし、11月26日にWHOが、新たなウイルス変異株であるオミクロン株を警戒度が最も高い分類の「懸念される変異株」に指定したことで、世界的に警戒が強まっています。ウイルス表面の突起部分に30か所以上の変異があるとのことで、感染力が高まっていることが懸念されています。今のところ、実態はまだ不明ですが、十分な注意が必要と思われるます。

先月でNHK大河ドラマ「青天を衝け」は終了しましたが、2024年には新一万円札の登場もあり、渋沢栄一はまだ話題になりそうです。渋沢と醸造試験所や醸造協会の関係としては、国の重要文化財である旧醸造試験所第一工場（赤煉瓦酒造工場）の赤煉瓦が、渋沢が設立した日本煉瓦製造株式会社のものであることは良く知られています。最近、古い醸造協会誌を見ていたら、第9巻1月号（1914年、大正3年）の冒頭に、渋沢栄一が醸造協会主催の第4回清酒品評会褒賞授与式で述べた祝詞の要約筆記が記載されていることを知りました。興味深い内容ですので、少しご紹介したいと思います。渋沢は、「盃一つも飲みますと真赤になると云うのであります」と自ら下戸であることを認めており、意外の感を持ちました。そのうえで、酒の徳と難点についても述べていますが、禁酒論に対しては実際に実行することは無理であるとしています。注目すべきは、清酒の海外輸出を大に行うべしとの論で、そのためには、技術改善に積極的に取り組むべきで、「一般醸造家が競ふて学理を応用し機械力によりて完全の進歩発達をはからなければ」ならないと述べています。また、品評会出品酒中に防腐剤を使っている酒が6割もあるということを指摘して、防腐剤などを使わずに品質を向上させることが必要だとしています。最後には、「諸君は酒毒の及ばぬ範囲に於て人に酒を勧め、それで清酒業の発展を図るということに御心掛けを願います」と、適正飲酒と酒類業の両立の言葉で締めくくっています。中庸を重んじた渋沢らしい演説であると感じました。原文は、J-STAGE（醸造協会ホームページからのリンクがあります。）で公開されています。

さて、醸造協会に関する動きでは、昨年11月25日に理事会、臨時評議員会がオンラインで開催され、令和4年度の事業計画及び予算が審議され承認されました。また、今年の協会主催のセミナーについては、コロナの状況がまだまだ不透明なことから、原則オンラインで実施することとなりました。清酒入門や実践き酒のように実習をともなうセミナーについては、今後の状況に注意しつつ開催を模索してまいります。